

博物館でラテンアメリカの先住民文化の意思を考える

鈴木 紀
民博 人類文明誌研究部



27カ国の博物館の
展示を調べてみました

コロンビア国立博物館の「多様性の壁」(2017年)

マヤ、アステカ、インカなど古代文明が栄えたラテンアメリカ。世界各地の博物館では、その文化を継承する先住民のさまざまな姿を紹介している。筆者は、5年の年月を重ね27カ国を訪ね歩いて、各地の博物館が先住民文化をどのようにとらえているのか、その意思を調べた。

二〇二四〜二〇二八年度まで、科研費の新学術領域研究(研究領域提案型)プロジェクト「古代アメリカの比較文明論」の一環として、南北アメリカと欧州の人類学、考古学、歴史学関連の博物館を訪問した。わたしの関心は、古代から現代までのアメリカ大陸の先住民文化を博物館がどのように展示しているかという点にあった。

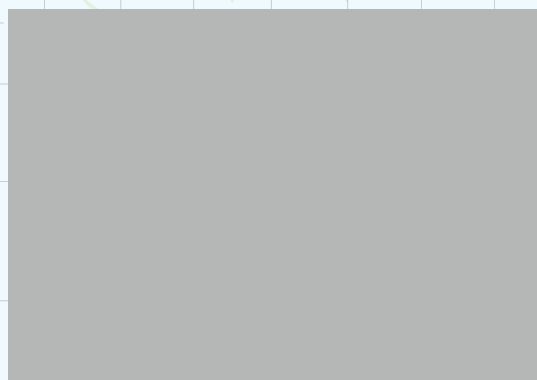
二七カ国の博物館

調査は二〇二四年一〇月八日、メキシコ国立人類学博物館館長のアントニオ・サボリ氏との面談から始まった。同館の一階にはメソアメリカ考古学展示場、二階には現代メキシコ先住民の民族誌展示場がある。わたしは冗談めかして、一階と二階のあいだには階段とエレベーター以外に何かあるのか、いったいどんな理論がふたつのフロアーを繋いでいるのかと疑問をぶつけてみた。サボリ館長もこの問いをおもしろがり、わたしの調査に賛同してくれた。それから五年後の二〇一九年三月一日、最後に訪問したのはキューバ国立美術館の「キューバ美術におけるタイノ的なもの」と題する展覧会だった。先住民文化タイノの文化を学ぶワークショップに参加した子どもたちの可愛らしい作品が展示されていた。この間に訪れた博物館は二七カ国、一〇〇以上にのぼる。

四つの意味

調査した博物館の展示を比べると、先住民文化に関する四つの意味が浮上した。

第一に、過去の貴重な文化



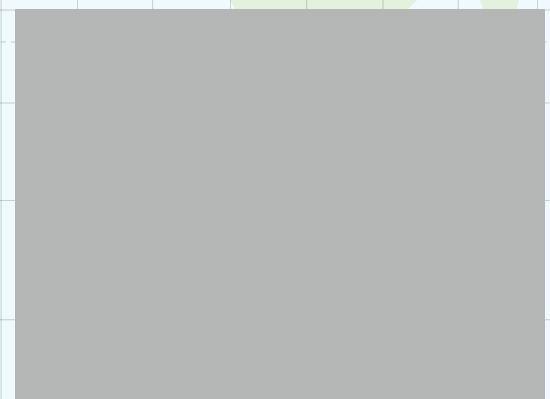
キューバの子どもたちが作ったタイノ風の焼物(2019年)

第四に、国民の文化的多様性の一端として先住民文化を描く博物館もある。コロンビアやコスタリカの国立博物館では、先コロンブス期の文化に加えて、現代の先住民文化だけでなく、アフリカ系の人びとやメステイソ(混血)の人びとの文化も幅広く紹介されている。博物館はいわば多文化共生のショーケースとして機能している。

博物館での出会い

博物館を訪問し、その場で遭遇する予期せぬ出来事が、先住民文化のありようを生き生きと伝えてくれることもある。メキシコのマヤ世界博物館の展示場では、案内役の青年がマヤ語で話しかけてくる。当惑する来館者を見て、すぐにスペイン語に切り替え、今のはわたしたちのことはですと説明する。アルゼンチンのJ・アンプロセッティ民族学博物館では、先住民マプucheの女性歌手のリサイタルがおこなわれていた。二〇世紀に絶滅したといわれる先住民民族セルクナムを悼むパフォーマンスの後、マプucheの民謡を厳かに歌う声が響いた。そしてキューバでは、前述したように、タイノ

文化に触発された子どもたちの作品に出会った。カラフルな色を塗られたタイノ風の器や、先コロンブス期の暮らしを再現したジオラマを見学した。こうした体験からいえることは、ラテンアメリカの各地で先住民文化の再評価が進んでいること、そして博物館がその重要な役割を担っていることである。



マプuche歌手B・ビチ・マレンのリサイタル(2018年)

遺産としての先住民文化だ。大英博物館のメキシコ室やメトロポリタン美術館の先コロンブス期美術室などでは、マヤ、アステカ、インカなどの文明の至宝が展示されている。しかしそこには、その後の先住民文化に関する資料や言及がほとんどないため、来館者にはもっぱら古代文明の断片として展示品を鑑賞することになる。

第二に、先住民文化を近代国家の基層として位置付ける場合である。ペルー国立考古学人類学歴史学博物館やチリ、アルゼンチン、ブラジルの国立歴史博物館など、ラテンアメリカの歴史系の博物館では、先コロンブス期の文化をその後の歴史過程とともに展示する。ところがこれらの博物館でも現代の先住民に関する情報は乏しく、先住民文化は植民地時代に消滅したという印象を来館者に与えやすい。

これらに対し先住民文化の歴史的連続性を強調する博物館もある。メキシコ国立人類学博物館やグアテマラ国立考古学民族学博物館、ボリビア国立民族誌民俗学博物館などでは、先コロンブス期の文化とともに現代の先住民の暮らしが展示で紹介されている。民族衣装を着たマネキンによって祝祭の場が再現されていたり、農具や手工芸品など、先住民の伝統的な生業が紹介されていたりする。こうした展示を通じて、古代文明を継承する先住民文化というメッセージが立ちあらわれる。